

ミロのヴィーナスと石膏像

美術工芸資料館 特任専門職（学芸員） 和田積希

美術工芸資料館には《ミロのヴィーナス全身像》を含む11件の石膏像（正確には石膏模像）が登録されている。ここに、2020年に工芸科学部倉庫で発見された41件の石膏像が加わり、さらにその後、館内から登録外の石膏像6件7点が認識されるに至り、合計58件59点となった。これが現在の京都工芸繊維大学所蔵の石膏像である。いやまて、学内で他にも見たぞという方がいらっしやれば、ぜひ美術工芸資料館までご一報を。

さて、これらの石膏像、戦後の教育で使用されたものが大半とみられるが、京都高等工芸学校時代にデッサンや粘土造型のモデルとして収集・使用された貴重なものも含まれている。そのうちの1つが明治35年（1902）の開校時にフランスから輸入された《ミロのヴィーナス全身像》（図1）である。もちろんかの有名な本物？のミロのヴィーナスではない。しかし、パリのルーブル美術館所蔵の大理石像《Venus de Milo》から直接石膏で型どりして製造された由緒正しき複製品（ムラージュ）である。その証拠に、台座正面に「MUSEES NATIONAUX MOULAGE」に刻まれたプレートがはめ込まれている（図2）。これは、1794年に創業したルーブル美術館ムラージュ工房（L'Atelier de moulage du Musée du Louvre）による製品を示すもので、同工房ではルーブル美術館等の所蔵品を中心にオリジナル作品から直接型どりをする手法で、石膏やブロンズによる複製彫刻を多数生み出してきた。現在もパリ郊外のサンドニで営業を続けている。現在、美術工芸資料館が保管する8件9点の作品に同様のプレートを確認することができる。

15世紀末から古代彫刻の発掘が進んだヨーロッパでは、ヴァチカンを中心に保存事業が進められ、古代ギリシャ・ローマを理想とするルネサンス美術の開花を後押しした。ヨーロッパの王侯貴族も競ってこれらの彫刻を収集し、さらにブロンズによる複製品を製造して宮殿を飾りたて、理想の美を追求したが、18世紀に入り安価な石膏が素材として導入されると、石膏像は、学生や芸術家たちの研究教材としても利用されるようになった。フランスやドイツでは、石膏による複製を製造するための国営工房が設立され、美術アカデミーや美術館には大規模な石膏像陳列場が設置された。ここからヨーロッパ由来の美は世界へと輸出されたのである。



図1
ルーブル美術館ムラージュ工房《ミロのヴィーナス全身像》
1902年頃、AN.0736
撮影：高野友実



図2
同工房のプレート

ルロッテン通りに移転している。当館の所蔵品のなかでは、3枚1組になっている《セコス壁羽目板》がこの工房の製品である（図3）。原型は邸宅の壁装飾とみられるが、京都高等工芸学校ではこのように石膏像にまじって、柱頭やフリーズなど建築装飾に関する石膏資料も収集されていた。実物はほとんど残っていないが、当時の教材台帳である『標本原簿』で確認することができ、工芸教育から建築教育へとシフトしていく同校の教育課程をうかがい知ることができる。

また、石膏像のなかには、日本ではじめて本格的な製造販売を手がけた菊地鑄太郎（1859・1945）による製品も含まれている。日本では、石膏像は明治初期に洋画塾を通じて導入された。京都高等工芸学校図案科の初代教授である浅井忠（1856・1907）が青年期にまなんだ彰技堂では、国沢新九郎（1848・77）がイギリスから持ち帰った石膏像を用いたデッサン指導がおこなわれたという。その後、浅井が1期生として入学した明治9年設立の日本初の官立美術学校である工部美術学校では、イタリア由来の美術教育が導入され、やはり石膏像が教材として用いられた。明治29年に設置された東京美術学校（現・東京藝術大学）の西洋画科でも石膏像が利用されている。当時同科の教授をつとめたのは黒田清輝（1866・1924）と浅井忠である。

菊地鑄太郎はこの浅井と同期で、明治8年に彰技堂に入って洋画をまなび、翌年、工部美術学校彫刻学科に入学、イタリア人彫刻家ヴィンチェンツォ・ラグーザ（1841・1927）にまなんだ。明治22年に明治美術会に参加、同29年に黒田清輝らとともに「白馬会」設立にかかわるが、明治16年頃から東京赤坂の自宅で菊地石膏模型所を立ち上げ、教材用の石膏模型の製造・販売を開始したようである。浅井忠とは青年期からつながりも深く、京都高等工芸学校における多くの石膏像が菊地から購入されている。

京都高等工芸学校の図案科では、デザインの基盤をなすものとして浅井主導のもとデッサン指導に力が注がれた。開校初期のカリキュラムは不詳の部分が多いが、明治45年発行の『京都高等工芸学校初十年成績報告本編』によれば、デッサンを軸とする「画学及画学実習」において、第1学級秋季学期に「当時は秋始業、まず人物を中心とする『木炭画模写』がおこなわれ、つづいて『石膏製飾板木炭写生 飾板中単簡ナル花葉果実柱頭飾等』、さらに同春季学期に「石膏製彫像ノ木炭写生 半肉丸彫ヨリ半身全身ニ及フ」がおこなわれた。第2学級から水彩や鉛筆による植物や器物、風景写生がはじまり、第3学級になると人物写生がおこなわれている。美術工芸資料館には同科1期生でのちに同校の教授となった霜鳥之彦



図3
ギプスフォルメライ《セコス壁羽目板》
1912年頃、AN.1579、1580、1581
撮影：高野友実



図4
霜鳥之彦《石膏デッサン 老人胸像 ポストゥムス・ファン・ドゥ・スロム》
1902年11月12日



図5
展示風景

この国営工房の1つが前述のルーブル美術館ムラージュ工房である。さらにもう1件ドイツの国営工房としてあげられるのが、今もベルリンで営業を続けているギプスフォルメライ（Gipsformerei der Staatlichen Museen zu Berlin）である。同工房は、1819年にフリードリヒ・ヴィルヘルム3世によって設立された「Königlich Preussische Gipsgussanstalt」（王立プロイセン石膏鑄造研究所）を前身にもつ工房で、プロイセン王立芸術アカデミーの教授であったドイツの彫刻家クリスティアン・ダニエル・ラウフ（1777・1857）が初代館長をつとめた。工房は1830年に開館した旧博物館（Altes Museum）の地下にあったが、1891年に現在のソフイー・シャ

（1884・1982）をはじめ、生徒たちの課題作品が残されており、当時の石膏デッサンの様子をみてとることができる（図4）。なお、こうした石膏像のほとんどは、昭和30年に本学工芸学部に管理換えされて備品となり、その後一部をのぞき廃棄されたと考えられる。しかし、詳細は不明である。現存する石膏像は比較的新しいものが多く、工芸学部では、戦後も継続的に石膏像を購入・管理していたことがうかがえる。

これらの石膏像は、展覧会「京都高等工芸学校シリーズ4 パリからお越しのミロのヴィーナス―京都高等工芸学校のデッサン教育」（2025年1月14日～2月22日）にて公開した。その様子を記録として掲載する（図5）。

以下に蔵品登録済の11件の石膏像をあげておく。その他の資料は現在登録作業中である。

- ・ルーブル美術館ムラージュ工房《ミロのヴィーナス胸像》1902年頃、AN.0731
- ・同《アグリッパ（農夫）胸像》1902年頃、AN.0733
- ・同《人体像（首手足ナシ）》1902年頃、AN.0734
- ・同《円盤投手立像（左手折損）》1902年頃、AN.0735
- ・同《ミロのヴィーナス全身像》1902年頃、AN.0736
- ・同《ギリシャの英雄イアン像》1902年頃、AN.0737
- ・菊地鑄太郎《ラオコン像》1903年頃、AN.0826
- ・同《ホームー像》1903年頃、AN.0827
- ・ギプスフォルメライ《セコス壁羽目板上部》1902年頃、AN.1579
- ・同《セコス壁羽目板中部》1912年頃、AN.1580
- ・同《セコス壁羽目板下部》1912年頃、AN.1581

参考文献

- ・瀬谷裕実「教材としての石膏像生産・流通と伝播―明治10年代から大正末まで」『美術教育学』33、pp.249-261、2012
- ・荒木慎也「石膏デッサンの100年 石膏像から学ぶ美術教育史」アートダイバー、2018
- ・「京都高等工芸学校シリーズ4 パリからお越しのミロのヴィーナス―京都高等工芸学校のデッサン教育」京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2025
- ・https://www.smb.museum/museen-chronungun/gipsformerei/home/（最終閲覧日：2024.12.25）
- ・https://recliers.gmu.dpulismn.fr/（最終閲覧日：2024.12.25）